

# 難民・異文化理解につながる映画上映とシンポジウムの開催意義に関する考察

## 「あいち国際女性映画祭」における難民支援団体との共同企画を中心に

佐藤 久美（名古屋国際工科専門職大学/あいち国際女性映画祭）

キーワード：「難民理解」「異文化理解」「多様性」「ジェンダー格差」

### 【1】目的

「あいち国際女性映画祭」(AIWFF。1996年から毎年開催)は、世界各国の女性監督による作品や女性に注目した作品を集めた、国内唯一の国際女性映画祭であり、4日間から5日間の期間中におよそ30本の映画を上映する。筆者はイベントディレクターとして、難民問題を扱う映画上映とその後の会場参加型のシンポジウムを開催している。そのテーマや内容について検討と考察を行う。

### 【2】方法

AIWFFの開催目的は、男女共同参画社会の実現に向けて、女性の生き方や女性と男性の相互理解など様々なテーマの作品を上映し、ゲストトークなどを交えて社会のあり方について考えることにある。2022年までに約450本の映画を上映し、映画製作国は日本、韓国、台湾、中国、シンガポール、イラン、フランス、スペインなど20カ国にのぼる。本稿では、2018年以降に特定非営利活動法人名古屋難民支援室との共同企画によって上映した映画を中心に、映画の内容、および、それぞれ上映後に行ったシンポジウムで行われた議論について検討する。来場者へのアンケート結果も考察の対象とする。



具体的には以下の5本の映画とシンポジウム（進行役：佐藤久美）を対象とする。

(1)名古屋難民支援室とAIWFFの共同企画による映画上映とシンポジウム

・2018年：『マイ・カントリー マイ・ホーム』（日本、ミャンマー/2018年）（監督：チー・ピュー・シン） ミャンマーの民主化運動に参加し、祖国を追われた両親と東京で暮らす女子高生のナンは、自身のアイデンティティについて思い悩む。

シンポジウム「日本に暮らす難民を知ろう！支えよう！」パネリスト：ケーシー・ディバック氏（愛知県在住。日本で初めてネパール人難民として認定される）と羽田野真帆氏（名古屋難民支援室コーディネーター）。

・2019年：『僕の帰る場所』（日本、ミャンマー/2017年）（監督：藤元明緒）ミャンマーか

らやって来た東京に住む家族の物語。二つの国の間で揺れ動く少年の心を描く。シンポジウム「日本の難民支援について考えよう」パネリスト：藤本監督、羽田野真帆氏。

・2021年：『すぐそばにいた TOMODACHI』（日本／2011年）（監督：セシリア亜美 北島）  
2011年3月11日に発生した東日本大震災後に、被災地に赴きボランティアを行った在日ビルマ人95人を追ったドキュメンタリー映画。

シンポジウム「ミャンマー情勢と難民の『今』を考える」パネリスト：セシリア亜美 北島監督、北角裕樹氏（ヤンゴン編集プロダクション代表）、羽田野真帆氏

・2022年：『マイスマールランド』（日本、フランス／2022年）（監督：川和田恵真）

突然在留資格を失った日本に住むクルド人の女子高校生と家族の葛藤が描かれている。

シンポジウム：「川和田恵真監督と考える 祖国から逃れて暮らす人々の居場所」。パネリスト：川和田恵真監督 羽田野真帆氏。

(2) ジェンダー平等性や女性の政治参加の意義を問う映画上映とシンポジウム

・2022年：『権力を恐れず真実を-米国下院議員バーバラ・リーの闘い-』（アメリカ/2020年）（監督：アビー・ギンズバーグ）米議会で2001年の同時多発テロに対する武力行使決議に唯一反対をした民主党連邦下院議員、バーバラ・リーを追ったドキュメンタリー。

シンポジウム：「平和で公正な世界を築くために：バーバラ・リー議員の果たした役割」パネリスト：アビー・ギンズバーグ監督、米国史研究者の柳澤幾美氏、岡田泰弘氏。

### 【3】結果と考察

(1) 各シンポジウムで、監督たちは、自分自身のルーツについて葛藤を抱えていることから同じような境遇にある人たちをテーマにした映画を制作することにしたと、その意図を語った。日本には、祖国から逃れて難民認定の申請をしているミャンマー人やクルド人らが数多く居住しており、将来が見えないまま不安な思いを抱いて生活していることを映画は伝えている。羽田野氏は世界各国との比較もしながら、日本の難民の受け入れ状況とその厳しいルールに関して説明した。参加者のアンケートからは「自分の隣人として多くの難民認定を待っている人々がいることを知った」、「祖国を逃れて日本に助けを求めている難民に対してもっと理解を持って、寛容であるべき」などの意見があった。

(2) 黒人女性議員として、アメリカで活躍するバーバラ・リー議員の活動を通して、社会の多様性を認めるための政治の役割を話し合った。日本の、特に政治の場でのジェンダー不平等性を解決することの重要性や、平和な社会の構築のために女性や子供たちの意見が反映されるような政治への期待などが話し合われた。

いずれの映画上映会にも多数の来場者があり、人々の関心が高いことがわかった

### 【4】結論

「映画を観て、その後に監督から直接制作の意図を聞き、テーマの社会背景についても学ぶことができ毎年、楽しみにしている」という感想が寄せられている。近年では、韓国やカンボジアなどで制作されたLGBTQ+をテーマにした映画も上映している。歴史背景、宗教、ジェンダー格差など映画に込められた情報量は大きいですが、多様な生き方、多様な文化を認めあう社会を構築するための「国際女性映画祭」の存在意義を確認できた。